

## 平成21年度飯田市社会教育委員会議の活動について

飯田市教育委員会

### 1、はじめに

本年度は、飯田市教育委員会が策定作業をしている「飯田市教育振興基本計画」について生涯学習・社会教育の立場から検討・協議を行い教育委員会事務局へ提言を行ってきました。

また、地域自治組織に包含された地区公民館の組織と役割の検証と課題の把握を意識し、公民館長会と意見交換を深めました。

### 2、活動の経過

#### (1) 社会教育委員会議

##### 定例会

第1回 4月17日(金) 於：本庁304号会議室

- ・平成21年度社会教育方針の検討と決定
- ・「飯田市教育振興基本計画」策定について
- ・平成21年度の活動について

第2回 11月30日(月) 於：教育委員会会議室

- ・「飯田市教育振興基本計画」について

##### 臨時会

第1回 7月3日(金) 於：本庁301号会議室

- ・「結い トライ アングル」(飯田型キャリア教育)の取り組みについて
- ・飯田市教育振興基本計画について

第2回 7月23日(木) 於：りんご庁舎会議室3

- ・「飯田市教育振興基本計画」について

第3回 1月14日(木) 於：下久堅自治振興センター

- ・「飯田市教育振興基本計画」について

飯田市公民館長会との意見交換会 1月14日(木)

於：下久堅自治振興

- ・研修「ひさかた和紙を活かした地域づくりを学ぶ」
- ・意見交換「地域自治組織の中の公民館活動状況」

第4回 未定

- ・「飯田市教育振興基本計画」について

#### (2) 関係団体の活動記録

①平成21年度長野県社会教員委員連絡協議会総会

6月16日(火) 於：長野県総合教育センター(塩尻市)

②平成21年度飯伊地区社会教員委員連絡協議会総会

6月22日(月) 於：阿智村中央公民館

③平成21年度長野県社会教育研究大会

9月25日(金) 於：長野県総合教育センター(塩尻市)

④中北部ブロック研修会

12月10日(木) 於：高森町福祉センター  
高森町指定文化財「下市田学校」

3、今後の課題と方向性

本年度策定が進められている「飯田市教育振興基本計画」や「地育力向上連携システム」の進捗や「わが家の結いタイム」に関する評価と検証、地域自治区における公民館の役割の実態把握等を通じて、当市の社会教育全般に助言・提言を行います。

**“結い・トライ・アングル”で、3つの「結い」を表します。**

キャリア教育は、一人一人の子どもと大人、そして地域全体が元気になる教育です。



**『働く・学ぶ・生きる』を結ぶ**

キャリア教育は、働くことを通じて今の勉強や生活が大切だと気付き、子どもたちの学習意欲や生きる力を高めるための教育です。



**『未来・現在・過去』を結ぶ**

キャリア教育は、過去の自分を振り返り、現在の自分を見つめ、未来の自分を描くための教育です。



**『学校・地域・家庭』を結ぶ**

キャリア教育は、学校と地域と家庭が連携を強化し、「地域の子どもは地域で育てる」ための地域の力を高める教育です。

～キャリア教育でつくる 3つの「結い」～

「飯田」の語源は「結いの田」といわれています。飯田には昔から、田植えなどの農作業の手間を交換しあう「結い」という仕組みがありました。これは互いの暮らしを支え合い、人と人を結ぶために先人が生み出した知恵です。

今、私たち地域の大人が、この「結い」の精神を受け継ぎつつ、地域の子どもたちに「働くことのすばらしさ」や「地域資源のすばらしさ」を伝えるキャリア教育の推進が求められています。

そこで、飯田市キャリア教育推進協議会では、“結い・トライ・アングル”をキャッチコピーとして「飯田型キャリア教育」の啓発活動に取り組むこととしました。

「キャリア教育とはどのような教育なのか」「結い・トライ・アングル」の啓発活動を通じて、学校・地域・家庭がキャリア教育の理解を深めていただくよう呼びかけていきます。

## ふるさとに誇りを持つこと

久保田くに子

英語を教えている友人から、高校生にお茶を教えてくれないかと電話があった。

長年茶道裏千家に席を置いているものの、まだ教えるには至っていない。だが動機を聞いて一肌脱ぐことにした。

高校生はこの春アメリカに留学する。友人は今までに何人か留学させているが、子どもたちが一応に感じるのは、いかに自分が日本の文化を知らないかということだそうだ。外国に行っても英語を学んでも自国の文化について語れない。話す内容を持っていないのだ。そのことで悲しい思いをする学生が多いという。留学まであまり時間は無いが、多少なりとも嗜むことが出来たら、少しはコミュニケーションの役に立つのではないかと、茶道の入り口だけでも学んでもらうことにした。

利休は「茶の湯とはただ湯を沸かし茶を点てて飲むばかりなること」と言っている。

茶道は日本の伝統文化として500年も前から伝えられているのだが、近年茶の湯に関心を持つ人は少なくなっている。それは、茶道の精神性に触れる学びの場があまり無いからではないかと思う。茶道は書・花・陶磁器・漆器・建築・菓子・懐石・着物など様々な日本文化と関連があり、総合芸術と言われる所以がそこにある。一歩足を踏み入るとその深さに興味は尽きない。ともすれば古くさく煩雑に感じられる動作も、実際にやってみると無駄を省いた合理性に驚かされる。閉塞感の漂うこんな時代だからこそ心の平安を求める人も多い。一服のお茶をおいしく飲み落ち着いたひと時を過ごし人との関わりを深めたいもの。是非多くの子ども達にお茶の世界に触れてもらいたい。日本人が何を考え、何を伝えてきたのかを知ることで日本人としてのアイデンティティーも確認できるのではないだろうか。畳のにおいにも癒される。

短いご縁でしたがお茶を楽しんでくれた高校生には自分のレベルでよいから自信を持って日本を紹介してくれたら嬉しい。楽しい留学生活が送れるよう心からエールを送りたい。

## 地域の方の温かな心に触れて

高坂敏昭

7月の初旬、地域の主婦の方から、学校宛に一通の手紙をいただきました。本校の女生徒が、脱輪して困っている若い女性ドライバーのために、通りかかる人にも手助けを呼びかけて救出に成功したというお話です。以下はその手紙の一部です。

「ドライバーの女性は、安堵の表情で無事に帰っていましたが、女子生徒さんは、協力してくれた人たちに、「ありがとうございます」と爽やかな笑顔でお礼を言い、お友達とさっと立ち去っていったのが印象的でした。その夜、帰宅した主人にこの出来事を話したら、「なんていい生徒さんなんだろう」と、主人の心にも爽やかな緑の風が吹いたようで、その日は一日の疲れも忘れ、笑顔の食卓になりました。先日、私は回覧板で『頑張れ！緑中』を拝見させていただき、みどりの心を育む活動に感銘を受けたばかりでした。この生徒さんにもきらきら輝くみどりの心を感じ、感心したと同時に、私の子どもたちにもこんな素敵な心を育てたいなあと感じた次第です。」

この出来事、たまたまその場に居合わせた女子生徒の小さな出来事です。しかしその小さな出来事が、それを目撃した大人の心を動かし、「この感動をぜひ伝えたい」と、わざわざ手紙にしたため送ってくださることにつながりました。

偶然の小さな出来事なのに、人の行為や心がこんなにも周りの人の心を清清しくさせるのはなぜでしょうか。「あの子のような心を育てたい」とあこがれを抱かせるのはなぜでしょうか。多分、その親切な行動が、私たち誰もが持っている「人の痛みを我がことのように感じる心」や「他人のために役立ちたいという思い」と響きあうからではないかと思います。人の行為やその行為を支える心持ちに触れて生まれた感動は、必ず私たちの心を揺り動かします。しかしそのためには、私たちの側に感動を受け入れる心の用意ができていなければなりません。

手紙をくださった方には、手助けをしてくれた生徒の、その行為の裏にある温かな心根を感じ取ってくださる心がありました。地域の方の温かな心根に触れてこそ子どもは育つことを実感した初夏のひとこまでした。

## 博物館活動を支えることと世代交代

小林正明

私は飯田市美術博物館の博物館活動を支えている伊那谷自然友の会に関わってきましたが、この数年にわたって懸念している不安なことがあります。これは地域社会を支える世代間の不安材料とも重なると思われる。そこで私の懸念を紹介して、自然友の会の問題ではなく、地域の共通の課題として皆さんとともに考えてみたいと思います。

飯田市の社会教育で全国に誇れるものは公民館活動の他に人形劇があります。私はそれにもう一つ飯田市美術博物館を加えたいと思います。飯田美博の素晴らしさは意外に市民に知られていません。

全国に博物館はどのくらいあるのでしょうか。博物館といってもその種類は千差万別です。学芸員数がそれなりにいるところから、全くいない所、管理の主体が公のところから、NPO、指定管理者のもの、また博物館法の制約を受けないものもあります。

県レベルで設置しているところには施設に優れ、学芸員のキャリアも他を圧倒するところがあります。飯田美博はこのような所と比較することはできませんが、県庁所在地クラスの都市の博物館と比べると、各段に活動が活発であると言えます。

優れていることはいわゆる展示博物館でなく、“動的な”博物館活動を大変によくやっていることにあります。多くの博物館は文字通り博物的な施設になっています。展示は旧態依然としたもので、館報などの定期的な刊行物もいかにも“官報的”で面白みがなくなっているのです。

“動的な”博物館活動とは従来の展示を中心にした博物館でなく、市民を巻き込んだ積極的な活動をする新しい概念のことです。地域の実情や時代の変化に対応した講座や観察会、研究会などを実施している博物館と比べていいのでしょうか。

例えば、昨年的美博の自然関係の活動をみると次のようです。

環境講座5、生物講座7、地質講座8、野外観察会等25などがあります。これだけの活動を行っている地方都市の博物館はほとんどありません。これらは伊那谷自然友の会と共催だったり、友の会の行事でもあります。この会はさらに会誌を年6回発行しています。

伊那谷自然友の会は美博の博物館活動と表裏一体の会とっていいでしょう。美博の設立にも中心的な役割を担ってきました。

このような活発な活動ができるのは、美博を創設した当時のこの地方の自然愛好家、私たちの先輩の努力であったからです。そしてその背景にはこの地方の人々の文化的なバックボ

ーンがあったといえます。人形劇を支えるものも同じですが、脈々と受け継がれてきた公民館活動を支えた民の力、さらには戦前からあった自由主義教育等を支えたものがあつたと思われます。もちろん、行政、市教委の人たちの理解や協力があつたためでもあります。

ところが、この博物館活動を支えているのは設立当時のメンバーがいまだに中心にいて、若者が少ないのです。また、各種講座の参加者がかなり固定されてきました。その内訳はいわゆる熟年、リタイヤ組が圧倒的に多いのです。会誌の編集委員も同様ですし、さらに諸行事の参加者が暫減しているように感じられます。このことを懸念しているのです。世代交代がなされていないと言っていいでしょうか。

このようなことが伊那谷自然友の会だけの問題であるならば、私はそう大げさに考える必要はないと思います。新しい世代が、博物館活動や伊那谷自然友の会以外の活動に生きがいを見つけ、新しい社会をつくり、地域の新たな文化をつくり、地域を支えていくなればそれは尊重すべきです。私の懸念は自分の興味の世界だけのことであったり、年寄りの単なるノスタルジアの様を示しているにすぎないからです。でもどうやらそうではないような気がするのです。

このようなことはどこからくるのでしょうか。まず社会全体の中に若者が少なくなっているという事情があります。と同時に興味の世界が違うということも考えられます。幼少の時期の原体験が熟年世代とまるで違うように思われます。その中で育った若者がどのような『地域』社会をつくるのか、まったく見えてこないのです。

私は伊那谷自然友の会が持っているこのような課題が他の文化団体ではどうなのかを探りたいと思っています。さらに友の会を背負っていく若者を探し、育てる活動を進めなければなりません。そして若者たち、彼らのつくる社会がどのようなものであるかを見極めていきたいと思っています。

## 子どもが育つ～～地域も育つ

清水 正則

毎月の初旬に松尾小学校と緑ヶ丘中学校と懇談会を行っている。私の立場は、飯田市社会教育委員、主任児童委員、まちづくり委員等である。

昨年4月、松尾小学校長室で校長先生、教頭先生、教務主任と3者で懇談している時、校長先生から「子どもたちが希望しているクラブを発足させ充実したものになりたいが、職員だけではまかなえないので地域の方の力を借りたい」と相談を受けた。「松尾の子どもは松尾で育てる」ことを大切にして取り組んでいるまちづくり委員会の会長さんに、早速小学校の依頼を伝えた。会長さんは「よし！引き受けましょう」と快諾してくださり、自治振興センター長と私の3人で、クラブ発足までに間に合うよう計画を立てた。「学校ボランティアを何日までに募る」「学校との連絡調整は清水が行う」等々細案を立てていった。定例自治会で説明を受けた区長たちは伍長会で説明し組合回覧を回した。

まちづくり委員会の呼びかけの結果、30人余がボランティアとして登録。学校では、ボランティア運営委員会を立ち上げ、担当職員との綿密な打合せが行われた。5月21日、クラブ発足のためのオリエンテーションが行われ、学校職員と地域ボランティアが先生となって、クラブ活動が展開されていった。

10月13日最終回を終えた子どもたちの感想の一部。

- ・ パソコンクラブでは、下敷き作りをやってきました。絵は個性豊で、楽しい下敷きができました。ボランティアの人たちにも教えていただきうれしかったです。
- ・ 伝統工芸クラブでは、ボランティアの先生方の手際の良さにあこがれながら、基本のあわび結びや、あやめ、梅などきらびやかな色で、水引き細工を楽しむことが出来ました。
- ・ イラストクラブでは、ボランティアの方に入っただき、イラストの基礎から学ばさせさせていただき、大変に意義のあるクラブ活動となった。
- ・ 百人一首クラブの 12 人は、自分の好きな歌を覚えたり、試合をしたりして楽しみました。地域講師の先生から歌についての詳しいお話をお聞きすることができました。
- ・ 囲碁将棋クラブでは、何人もの講師の先生方に来ていただきました。囲碁の人たちは、初めての人が多く、先生方も大変そうでしたが、みんな話をよく聞き、対戦が出来るようになりました。将棋では、指し方を知っている人が多く、先生方と対局しました。とても面白く、いいクラブになったと思います。

地域ぐるみで育てた子どももやがて大人になる。子どもを育てると言うことは、子ども自身の地域社会に対するまなざしを涵養する時間も大切である。

まちづくり委員会活動に携わる一人ひとりの想い——。地域に愛着を持つ子どもに育てたい。これらの活動を通して、地域社会を元気にしたい。

このように意識して、社会教育委員としてこれからも取り組んでいきたい。

## 私の地域活動

下平千津子

社会教育委員一年生です。

お役の責任感に戸惑い、左見右見しながらも、まずは「知る事」と会議・行事・研修会等努めて参加しました。そこで出会った方々は、地域と密に関わり、尽力し、活動を支えていて、感銘を受けました。翻って、私自身の地域との関係についても考える事になりました。

私が地域と関わっている活動に国際交流ボランティアがあり、「ハンドインハンド」というグループです。私はその一会員です。

国際化という目で飯田を見れば、世界各地からの参加がある人形劇フェスティバルがあります。在住外国人は、仕事で来たアジアの人、国際結婚をした人、地域柄故の中国の人、それに加え、国の入管法の改正に伴い、日系外国人の労働者と増加の一途をたどりました。親しくなった外国籍の人と交流を続けるうちに、一番の問題は、言葉の壁だと解り、地域に住む外国人に関わりながら、共に生きる仲間として日本語教室を開き支援していこうと会員の意見がまとまり、活動の中心を日本語教室に置きました。

拠点となる場所は、店主が地域の人が利用し、集まれる場所にと開いたおやきの店「和楽」の二階です。毎週土曜日の午後、二時間位、会の運営は、月一人500円の拠金、市民レベルの会です。行政からの支援もありました。市のムトス事業から市民活動として認められ、資金面での援助があり、教材、備品等充実してきました。継続して十六年、三十カ国からの来訪があり、私達は、世界各地の文化暮らしを知り、楽しい交流もあり、外から見た日本を知る事が出来ました。

外国人集住都市としての飯田市は、多文化共生の道を理念として掲げています。国際化共生の道へヒントが生まれる場として、地域に発信していくためにも、草の根の交流を地道に

続けていきたいと思います。

## 社会教育委員一年生

西森六三

日常の中で「社会教育」という言葉はよく耳にしていました。しかし「社会教育って何」と聞かれた時に明確な答えが出なかったのです。そこで「教育というサークルの中で社会教育の分野はどの部分か」と聞いた時の教育委員会事務局職員の答えはこうでした「学校教育を除いた部分です」。そんな漠然とした括りの中でどのような考えのもと何をどうしていくのか、どんな活動ができ、どんな役割をしていかななくてはいけないのか全く訳の分からない委員を受けてしまったものと後悔さえ思ってしまった。

「住民の方々が幸せと感じられ充実した生活が送れるような社会の確立の為に社会教育委員は活動するのです。」と良く書かれている文章は抽象的であり理解できませんでした。そこで、私なりに社会教育委員としてどんなスタンスで取り組んでいったらいいのかを考えてみました。

私が委員として委嘱された理由を察するに、柔道の指導者を十七年間しており社会体育に関わりが深い事。また、高校生と中学生の親であり子育て真只中の現役世代である事。飯田市で導入している地域自治組織の「まちづくり委員会」の委員長の経験者であった事。などだと思います。

だとすると、地域の文化・芸術・各種イベントに子供達と連れだって参加体験し、その更なる発展の為のお手伝いをするのが使命となるのだと思います。また、学校教育の現場と地域社会との橋渡しや情報交換のお手伝いをする事や、学校では踏み込むことのできない親の教養のスキルアップの為の情報発信源となることも活動の大事なものと考えます。

とにかく「百聞は一見に如かず」の精神で現場へ出向き体験しその中で主力となって活動している人達と多くを語るどころから始めていきたいと思っています。

## 高齢家族

原 亮弘

「お母さん、財布が見当たらない」、「お母さん、郵便局の通帳がどっかへいっちゃった」。87歳になる母が、私の妻に発している声である。妻は、ベッドや普段生活している居間など、周辺を探してみるが見つからない。数日経つと本人が何事も無かったようにその手にそれらを持っている。我が家で最近よく見る光景である。

その妻と私（二人共つい最近還暦を迎えた）との会話。

妻：「お父さん、えーとあの何ていったっけ、その人と今日あの店で会ってあのときの話をしたんだに」。

私：「あの人って誰よ、あの店ってどこよ、あの話って？」

妻：「あの人よ！そこの家のおばさんよ！」

私：「ああ、そこのおばさんか」

文字に起こすとほとんど会話になっていないが本当である。夫婦の会話に「あの、それ、あれ、その…」などの言葉がやたら出てくる。残念ながら固有名詞が浮かばないのである。

私たちの子どもは26歳の長男一人である。ひょっとすると近い将来3人の痴呆症の家族を抱えなければならないかもしれない。それどころか結婚した相手が一人娘であったなら。

考えるだけでも重たい気持ちになる。

少子高齢化社会に突入した今後はそういった事例が多くなるのではないだろうか。

既にこの問題について政策や制度などで、支援の取り組みは始まっているが、まだまだ充分ではない。介護制度の拡充や施設の充実、それを担う人材の育成。政治や行政がやらなければならないことは沢山ある。しかしそれだけではまだ十分とはいえない。人々が住み暮らす地域が、それらを支え合う社会の再構築が求められているのではないだろうか。

## 共に歩みたい ずっと ずっと 幼子との現在、未来、喜び、哀しみに添って

福澤生子

寒晴れの下、幼子の声が響きます。信州伊那谷の豊かな豊かな自然の中で育まれている幼子たち。その自然の素敵に気付いて欲しい。観、聴き、感じ、心に覚えて・・・と。勿論違った環境で、それぞれに導き、支えを受けての二歳から六歳。個があり、グループで、集団で、と様々に園生活が展開されています。三つ子の魂～と言われていますが確かに潜在意識の中で今の日々が積み重ねられていることを思います。感性、知性、徳育、知育の順序とバランスある育ちを願って。『皆んな違って皆んな大切』

社会教育委員としての任をお受けし、さて、何を、どのようにとこの十ヶ月を振り返りました。特別な何事もしていない自分を申し訳なく思います。が幼子にも、学生、親御さん、また何方にも「大丈夫、大丈夫」「あなたは愛されている」「あなたを視ている」「あなたは、必要とされている」「あなたは素敵」と言葉掛けができれば、また駆け込み寺ならぬ駆け込み人、家、電話、保育園、幼稚園でありたいと思い、願い、自信に課しております。

穏やかに温かく、晴れやかな明るさとけじめをもって。弱さを知り感じつつ、それでも尚幼子のモデルとしての努めを担って。

これから皆さまに教えて頂き、学び、社会教育委員としての歩みを探って進みたいと思っています。

## 子どもの姿は、大人の姿の写しである

松澤秀明

こんな新聞記事を読みました。「厚生省のデータで朝食の欠食率を見ると、20代、40代の親の世代が食べていない。これが子どもたちに伝わっています。こうした親の問題に関連して、大阪の学校を調べたら、早起きする家庭の子どもたちは94%が朝食を食べている。逆に遅起きだと88%に下がる。遅起きをする家庭では、朝ご飯を食べなくなり、子どもがだめになる」という内容でした。(読売新聞、平成21年11月25日付・「朝食とれば頭・体さえる」東海大学教授・小沢治夫) この記事の中でハットしたのは「子どもの気になる姿は、それは大人の姿の写しである」ということでした。

学校現場では、様々な子どもの様相がみられます。学校が一生懸命に務めてもできることには限界があります。そこで、なんとか保護者の皆様と課題を共有化してみんなで取むことができないかと願って学校評価の行い方を工夫してみました。それは、まず校内に、保護者・地域・教職員それぞれの代表からなる「学校評価委員会」(仮称)を設けました。この委員会で特に考えたことは、重点目標について、それぞれの立場でどのように取り組むか、具体

的な手立てを（作戦）、あらかじめ評価カードに記入しておいていただき、それぞれが自分の取り組みの状況の評価するという仕組みを作ることでした。こう考え背景には、学校評価がともすると「学校のやっていることに対して評価する」という当事者意識がない中で行われ、その結果が必ずしも改善に役立っていないという反省からでした。

子どもが抱えている課題の多くは大人の課題でもあります。課題解決に向かって共に努力することによって解決の糸口が見えてくるように思います。子どもへの一方的な要求だけでは、子どもが可愛そうだと思うのです。また、私たち大人は夢を語ることを忘れてはいけないとも思います。

## すくすくふれあいタイム

松村由美子

ここ数年ずっと心に留めてきた「赤ちゃんと中学生とのふれあいの時間を持ちたい」という願いを今年度、形にすることができた。

まだ言葉を使うことすら難しい赤ちゃんに向かい合った時、生徒は何を考慮どう行動するのか。たったひとつでもいい、赤ちゃんに触れ、見守り手を添える親に何かを感じてほしい。心で感じる時・命を感じる時を持ってないか。その思いに込めてくださったのは、公民館そして息子がお世話になっている中学の担任であった。学校側に趣旨をわかっていただき、授業時間を使っての協力をいただくまでには時間もかかり悩むことも多かったが、主事・保健師の応援と、担当している0～1歳児学級の母親たちの協力を得ることができ、実現にたどり着くことができた。

事前授業として、保健師からは「乳児の発達について」、7カ月の子を連れたSさんからは「子どものいる生活」、私からは「実習にあたり」のお話をさせてもらった。実際の赤ちゃんを見た生徒たちの顔がとても柔らかくなり、産まれることのできなかつた命の話には、感じるものが多かった事が感想の中にあつた。そして当日。生徒だけでなく、乳児を初めて会う生徒に委ねる母親たちにも緊張の様子が伺えたが、次第に和めたのはやはり赤ちゃんのパワー！とても良いふれあいの時間が持てたのは言うまでもない。双方からいただいた感想に、笑みと涙がこぼれた。母親になってまだ間もない母達が、生徒に対しとても温かな親の気持ちで生徒に接してくれたこと。生徒は、赤ちゃんにかわいさだけでないものを感じ、親のすごさを感じ、自分がいつか親になったら…という夢も持った様子。私の想像以上のものがそこに生まれていた。

この活動をきっかけに、他学年でも母親の話や子育て支援の話、そして子育てサークルとの交流へとつながった。これらの活動を通して、学校教育と地域・社会教育の場面を結びつけて活動させてもらうことは難しいことだと感じた。中学という多感な時期だからこそ体験してほしいと願うが、今の学校事情ではそうはいかないのが現状。キャリア教育が職場実習というだけでなく、地域活動・社会教育を通して大人や社会の様々な関わりを学ぶ場になってもらえたらと深く思った。

